

トマトキバガ情報第3号（トマト）

令和8年3月23日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

中山間部で越冬を確認！夏秋トマト栽培では育苗期から注意！

1 トマトキバガの発生状況

中山間部の夏秋トマト産地において、ハウス外に設置したフェロモントラップで、12月下旬から1月下旬の間に成虫2頭が誘殺されました。また、枯死株が残ったビニール被覆ありのハウス内に設置したフェロモントラップで、2月中下旬の1週間に1,200頭以上が誘殺されました。

トマトキバガが中山間部で多数越冬している状況であり、今後のトマト栽培における被害が予想されます。本虫の詳細な生態については、令和6年9月9日発表の「令和6年度病害虫発生予察特殊報第2号」を参照して下さい。

2 夏秋栽培における防除対策

(1) 栽培期間中

ア コナジラミ類の防除対策を兼ね、施設栽培では開口部に0.4mm目合い（トマトキバガに限る場合は1mm以下）の防虫ネットを張ることが推奨されます。ネット等の破れやすき間は補修し、本虫の施設内への侵入を防ぎましょう。

イ 育苗期や定植時には、灌注剤や粒剤を施用し、本虫を防除しましょう（表1）。

ウ 葉や果実を日頃から注意深く観察し、疑わしい食害痕の早期発見に努めましょう（写真1、2）。

エ 登録農薬による薬剤散布を適宜行いましょう（表1）。薬剤感受性低下を防ぐため、異なる系統（IRACコード）の薬剤でローテーション防除を行いましょう。

オ 本虫による被害葉及び果実はほ場周辺に放置せず、速やかに土中に深く埋却するなど、寄生した成幼虫（写真3、4）を全て死滅させてから処分しましょう。また、収穫残渣も本虫の増殖源になるため適切に処分しましょう。

(2) 栽培終了前後

ア 本虫が多発したほ場では、栽培終了前に登録農薬を追加散布し、本虫の密度低下を図りましょう。

イ 栽培終了後は株を速やかに枯死させましょう。幼虫は果実内で長期生存する恐れがあるため、果実は土中深くに埋設するか、袋に入れて密閉するなど早めに処分しましょう。施設栽培では、ハウスを密閉して成虫の野外への拡散を防ぐとともに、片付け作業は成虫が飛び回らないことを確認した上で行いましょう。

ウ 本虫が多発したほ場では、マルチや誘引紐等の資材に幼虫や蛹が付着している場合があるため、使用後は速やかにビニール袋に入れて廃棄処分することが推奨されます。

(3) その他

ア 本虫の発生源になり得るナス科雑草（イヌホオズキやワルナスビなど）は除草しましょう。

3 連絡先

農業総合試験場環境基盤研究部病虫害防除室
電話 0561-41-9513 (ダイヤルイン)

表1 トマトキバガに登録のある農薬 令和8年3月23日現在

薬剤名	希釈倍率 または使用量	使用時期	使用回数	適用作物		IRAC コード
				トマト	ミニトマト	
ベリマークSC ※1	薬量 400株当り25ml (灌注) (希釈水量 400株当り10~20L)	育苗期後半~定植当日	1回	○	○	28
プレバソンフロアブル5 ※2	100倍 (灌注)	育苗期後半~定植当日	1回	○	○	
プリロッソ粒剤オメガ ※1	2g/株 (株元散布)	育苗期後半~定植時	1回	○	○	
ディアナSC	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	5
ダブルシューターSE	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	- , 5
アグリメック	500~1,000倍	収穫前日まで	3回以内	○		6
アニキ乳剤	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	
アフーム乳剤	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	○	○	
ゼンターリ顆粒水和剤	1,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	-	○	○	11A
チューレックス顆粒水和剤	1,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	-	○	○	
ジャックポット顆粒水和剤	1,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	-	○	○	
エスマルクDF	1,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	-	○	○	13
デルフィン顆粒水和剤	1,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	-	○	○	
チューンアップ顆粒水和剤	2,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	-	○	○	
コテツフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	22A
トルネードエースDF ※3	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	○		
ファイントリムDF ※3	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	○		
アクセルフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	22B
フェニックス顆粒水和剤	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	28
ベネビアOD ※1	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	
プレバソンフロアブル5 ※2	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	
ヨーバルフロアブル	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	30
グレーシア乳剤	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	
プレオフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	

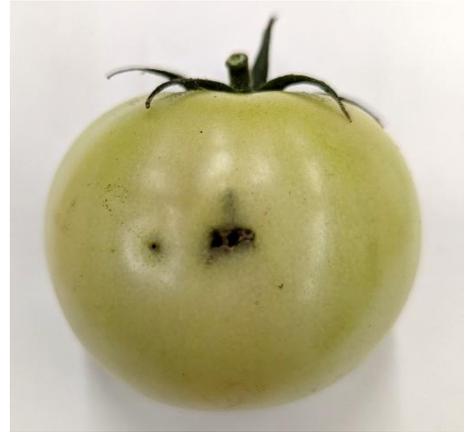
成分ごとの総使用回数に注意する。

- ※1 シアントラニプロロールを含む農薬の総使用回数は、5回以内(定植時までの処理及び定植直後の株元灌注は合計1回以内、定植後の株元灌注は1回以内、定植後の散布は3回以内)。
- ※2 クロラントラニプロロールを含む農薬の総使用回数は、4回以内(定植時までの処理は1回以内、散布は3回以内)。
- ※3 インドキサカルブを含む農薬の総使用回数は、2回以内。
- IRAC コードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。
IRAC コードの詳細は https://www.croplifejapan.org/assets/file/labo/mechanism/mechanism_irac03.pdf を参照する。
- 薬剤の使用に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。



茎葉の内部に幼虫が潜り込み、食害部分は表面のみを残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる。ハモグリバエ類では線的な食害痕となるのに対し、トマトキバガでは面的な食害痕となる。

写真1 トマトキバガによる葉の食痕



果実表面に数 mm 程度のせん孔痕が生じるとともに食害部分の腐敗が生じ果実品質が著しく低下する。

写真2 トマトキバガによる果実被害



写真3 トマトキバガ終齢幼虫（体長7.5mm）



写真4 トマトキバガ成虫（体長5～7mm）